View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

JFS/CEFR に基づく JFS 日本語講座レベル認定試験（A１）の開発

熊野七絵・伊藤秀明・蜂須賀真希子

〔キーワード〕レベル認定試験、JFS 日本語講座、JF 日本語教育スタンダード、CEFR、A１

〔要　旨〕

JF 海外拠点では JFS に基づく日本語講座を順次開講しつつあるが、特に欧州では学習者から CEFR に準拠したレベル証明のニーズが高いことから、JF欧州３拠点でJFS/CEFRに基づくレベル認定試験（A１）を共同開発することとした。まず、各国の CEFR 準拠の試験作成基準、試験問題等を収集、分析、検討し、CEFR 試験開発マニュアルのサイクルや手順、留意点に従い、試験を作成した。全体構成や課題・設問形式は他言語の試験と同様に読解、聴解、作文、会話の４科目とした。トピック、課題の難易度、文型や語彙の範囲、表記の扱いは日本語の使用場面を考慮した『まるごと』を基準とした。試行試験を実施し、結果を分析したところ、A１として適切な難易度であり、日本語でも JFS/CEFR に基づくレベル認定試験の開発が可能であることを示せた。一方、聴解で文字選択肢が負担になるなど、日本語ならではの課題も明らかになった。

１．試験開発の背景と目的

1.1　JF 日本語教育スタンダードと JFS 日本語講座

国際交流基金（以下、JF）の海外拠点では、2010年に JF 日本語教育スタンダード（以下、JFS）が発表されてから、JFS が目指す教え方、学び方、学習成果の評価のしかたに基づいてコースデザインされたさまざまなレベルの JFS 日本語講座が開講されている。そして、2011年５月には JFS 準拠教材『まるごと　日本のことばと文化　入門　A１　試用版』[1]（以下、『まるごと』）が刊行され、各拠点ではこの新しい教材を使用した A１レベルの JFS 講座の開講も始まっている。

一般成人を対象とした A１レベルからの『まるごと』を使用した JFS 日本語講座としては、マドリード日本文化センター（以下、JFMD）では、2011年10月から６月にかけて、３学期制、計120時間の JFS 年間講座（『まるごと』活動編、理解編併用、入門 A１を修了し、初級 A２－１の第10課まで進む講座）、１月から６月にかけて、２学期制、計80時間の JFS 入門講座（活動編、理解編併用、『まるごと』入門 A１のみで修了する講座）を開講しているほか、同一のコースデザインで共催団体の CASA ASIA でも JFS 年間講座および入門講座を開講している。ケルン日本文化会館（以下、JFCO）では1970年に初級コースが開講されて以来、初級から上

級までの９レベルの講座が行われているが、2012年４月より３ヵ月ごとの本コース（夏学期、冬学期）でＡ１レベルから順次『まるごと』を使用した講座(『まるごと』活動編、理解編併用、各学期に12課ずつ進む講座）へと移行している。パリ日本文化会館（以下、MCJP）では2011年10月より、『まるごと』を使用した日本語講座を開講し、活動編のみ３ヶ月コースや、活動編、理解編併用９ヶ月コース及び６ヶ月コースを開講してきた。また、2012年夏以降、JFCO、MCJP ともにＡ１レベル修了を目指すコース設計になっている。

この『まるごと』を使用した JFS 講座（Ａ１）の評価は、ポートフォリオとそれを生かした学期末の「テストと振り返り」に基づいて行われている。学期末テストは、活動編では文字の読みと Can–do 課題に基づく口頭試験、理解編では筆記試験（文字、語彙、文法、聴解、読解、作文等）が行われるが、これらは既習の範囲の Can–do 課題や学習項目の理解や定着を確認する達成度テストである。講座修了条件としては、出席率、学期末テストの成績、ポートフォリオの記録や提出などが要件となっており、評価や修了条件は拠点によって異なる。JFMD では、2011－2012年度の JFS 講座の修了条件としては出席、学期末テストの成績、ポートフォリオの提出いずれも60％以上であることとしている。JFCO では出席50％以上、学期末テストの成績60％以上、ポートフォリオの提出としている。一方、MCJP では学期末テストは実施していない。

1.2　CEFR 準拠のレベル認定ニーズと JFS 日本語講座レベル認定試験開発

欧州では、欧州言語をはじめとした主要言語の公的な言語能力試験は欧州の言語共通参照枠である CEFR（Council of Europe 2011）に準じたレベル設定[2]や課題を採用した試験に移行しつつあり、CEFR に基づく試験開発マニュアル“Manual for Language Test Development and Examining”（ALTE　2011）も公表されている。また、各国で教育段階や教育機関種別に言語間で共通する試験作成基準が設けられ、各教育機関において講座修了時のレベル認定やレベル認定試験なども行われるようになってきている。そのため、機関内で日本語についても同様の試験作成が求められるようになり、学習者からの CEFR レベルに準拠した日本語能力証明のニーズも高まっている。

一方、日本語の能力を認定する公的な大規模試験としては、国際交流基金と日本国際協力支援協会が実施する日本語能力試験があり、2010年より新しい試験として課題遂行のための言語コミュニケーション能力を測るものとなったが、Ｎ１－Ｎ５までの５段階レベルによるものであり、CEFR や JFS のＡ１－Ｃ２レベルに対応した試験ではない。また、試験科目も言語知識（文字・語彙・文法）、読解、聴解に限られており、作文や口頭試験は実施されておらず、CEFR に準拠して作成された試験ではない[3]。

そこで、欧州の JF 拠点である JFMD、JFCO、MCJP の３拠点において、拠点間で共通して

使用する JFS 日本語講座レベル認定試験（A１）を共同開発することとした。

２．CEFR 準拠の試験開発マニュアルと公的言語能力試験の調査・分析

試験作成にあたり、まず、ALTE（2011、前掲）の試験開発マニュアルの手順や留意点を確認するとともに、スペイン語、ドイツ語、フランス語の公的言語能力試験や各国で開発された CEFR 準拠の試験作成基準、日本語の試験問題等[4]を収集し、どのような構成、課題、設問で作成されているかを分析、検討した。

2.1　試験作成マニュアル

試験開発マニュアルでは、試験開発サイクルとして、Planning（計画）→Design（デザイン）→Try–out（実施）の段階を踏み、試験の作成は、Test specifications（試験基準の設定）、Assembling test（試験素材・問題作成、質の調整、全体の調整と構成）、　Live test material（実施用試験問題の作成）の順に行うことが示されている。また、望ましい試験素材選定や問題作成、作成した問題の検討や調整をどのように行うかなどについても、参照すべき CEFR の該当記述部分が言及されるとともに、サンプル事例や練習課題等が示されている。

2.2　各国の公的言語能力試験

各国の公的言語能力試験として、Instituto　Cervantes（セルバンテス協会）が実施するスペイン語の DELE　A１、Goethe–Institut（ゲーテ・インスティテュート）が実施するドイツ語の GOETHE–ZERTIFIKAT　A１、CIEP（国際教育研究センター）が実施するフランス語の DELF A１の試験を分析、検討した。全体構成と時間設定は表１の通りである。これらの試験は CEFR に準じて開発されたもので、各レベルごとに実施され、当該レベルの能力に到達しているかどうかを合否によって認定、証明する試験である。それぞれ教師、学習者向けに実施要綱やサンプル問題が Web 上で公開されている。

表１　各国の公的言語能力試験 A１の全体構成と時間設定

	スペイン語 DELE	ドイツ語 GOETHE –ZERTIFIKAT	フランス語 DELF
読解（書きことば、受容）	45分	25分	30分
聴解（話しことば、受容）	25分	20分	20分
作文（書きことば、産出・やりとり）	20分	20分	30分
会話（話しことば、産出・やりとり）	15分 （個別）	15分 （グループ）	５－７分 （個別）

Ａ１レベルについては、DELE、GOETHE–ZERTIFIKAT、DELF のいずれも CEFR の４つのコミュニケーション言語活動で試験科目が構成されている。時間配分や試験区分、順序は試験によって異なるが、４つの科目ごとの配点が総合得点の25％であること、作文と会話は産出とやりとりの課題を含み、複数の採点者が定められた非公開の採点基準を使って採点することなどは共通していた。

課題の設定は、CEFR のＡ１の能力記述文に基づいているため、自己紹介、住居、注文、買い物、日常生活などトピックや場面設定の多くが共通していた。また、設問形式についても、読解や聴解では、写真やイラストなどの視覚情報、あるいはフレーズや文などの文字情報による３択の選択式問題や多項目のマッチング問題、正誤問題が多いこと、作文では個人情報記入、メールや葉書のやりとり、会話は一人で自己紹介するような産出型と質疑応答、ロールプレイなどのやりとりが組み合わされているなど、共通点がみられた。

これらから、試験の構成や評価方法、課題設定や設問形式における CEFR 準拠のＡ１試験の共通点や方向性を確認することができた。

３．試験開発

3.1　JFS/CEFR に準じた試験開発

以上の CEFR に準拠した試験開発の先行事例をふまえ、JFS 日本語講座レベル認定試験（Ａ１）開発においては、以下の点で JFS/CEFR に準じて試験開発を行うこととした。

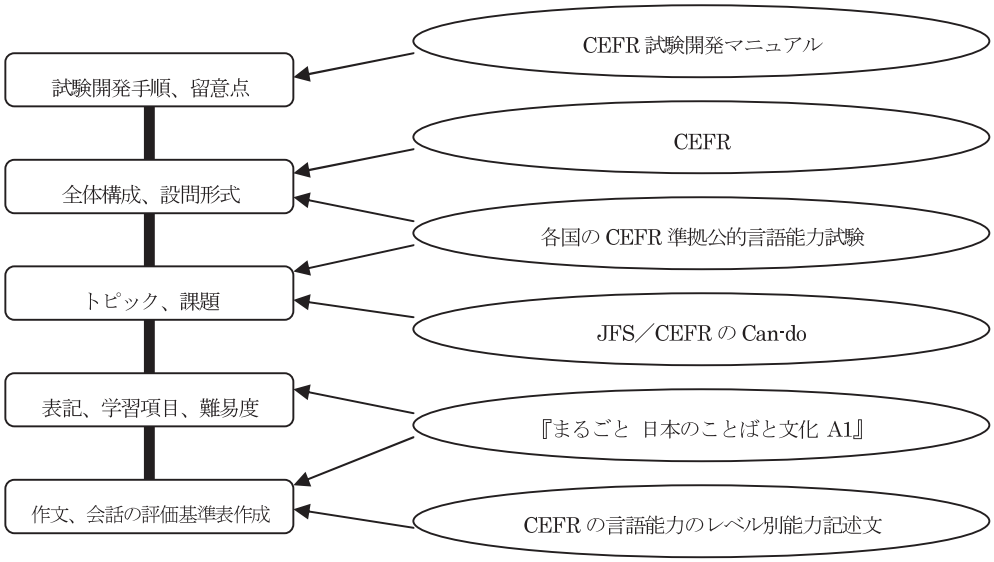


図１　JFS/CEFR に準じた試験開発

まず、試験作成手順については、CEFR に基づく試験作成マニュアルに準じて段階を追って

作成した。次に、試験の全体構成についても、CEFR に準じ、試験マニュアルおよび各国公的言語能力試験の共通点を踏まえて、４つのコミュニケーション言語活動で科目を構成し、設問形式もこれらに倣ったものにした。例えば、それぞれの科目ごとにマッチング問題、正誤問題、選択肢問題などの設問形式を設定し、マッチング問題では文字情報×視覚情報または文字情報×文字情報のどちらにするのか、聴解問題では独話または会話なのか、などバランスを考えながら、全体の調整を行った。トピックや課題の設定については、CEFR 準拠の公的言語能力試験の共通点を参考にしながら、『まるごと』で扱われているトピックや課題を言語活動ごとに再度洗い出し、試験問題として利用できるかどうか一覧にし、CEFR と JFS の活動 Can–do と突き合わせて確認し、トピックと課題を設定した。一方、日本語の場合、読解や作文にオーセンティックな素材を使用すると、表記の独自性によって課題の難易度があがったりすることなどから、日本語ではどんな素材を使い、A１ではどんな文字、語彙、文型を範囲とするのかということが課題となる。これを解決するため、今回は JFS に準拠して作成された『まるごと』A１を指針とすることにした。指示文に関しては本試験が試用版であり、文字・語彙、文型を『まるごと』に準拠することから、『まるごと』同様、日本語のみでの指示文とした。また、会話、作文の評価に使用する評価基準表は、課題達成度と質的側面の２段階で作成することとし、質的側面については CEFR の言語能力に関するレベル別の能力記述文を参照して作成した。

3.2　全体構成

本試験の全体構成は A１レベルの各国語の CEFR 準拠試験や試験マニュアルの構成に準じ、読解・聴解・作文・会話の４科目を設定した。試験時間は JFS 講座授業時間内での使用を検討していたため、JFS 講座授業時間の120分内で終了できるよう、読解が50分、聴解が20分、作文が25分、会話が10分の計105分とした。配点はそれぞれ25点で合格基準点は科目ごとに10点以上かつ合計点が60点以上とした。全体構成をまとめたものが以下の表２である。

表２　全体構成

	科目	カテゴリー	テクスト	試験時間	配点	合格基準点
①	読解	受容	書き言葉	50分	25点	10点以上
②	聴解	受容	話し言葉	20分	25点	10点以上
③	作文	産出・やりとり	書き言葉	25分	25点	10点以上
④	会話	産出・やりとり	話し言葉	10分	25点	10点以上
				105分	100点	60点以上

3.3　読解

課題１では趣味や休日にすることに関する短文を読み、関連するイベントポスターを選ぶという文字情報×文字情報、課題２は５名の好みに合わせた朝食を選択する文字情報×視覚情報、課題３は５つのパーティーや食事に関する誘いのメールを読んで、集合場所までの行き方のメモを選択する文字情報×文字情報、課題４は家族の紹介文に対する正誤を問う内容理解問題、課題５は一日の生活に関する文章とその内容を選択肢で問う内容理解問題、課題６は課題遂行型の問いとして、１名の趣味などの基本情報と４名の紹介文を照らし合わせ、最も気の合う友人を選択する課題を設定した。

読解の配点は１問１点とし、課題達成型の課題６のみ１問３点とした。

表３　読解問題の細目表

課題	設問数	配点	設問タイプ	タスク
課題１	5	5	文字情報×文字情報、マッチング	趣味や休日にすることの短文を読み、関連するイベントポスターを選ぶ。
課題２	5	5	文字情報×視覚情報、マッチング	食事の好みに関する短文を読み、好みに合った朝食のイラストを選ぶ。
課題３	5	5	文字情報×文字情報、マッチング	イベントの誘いメールを読んで、集合場所までの行き方のメモを選ぶ。
課題４	4	4	文章の内容理解、○×	家族の紹介文を読んで、家族についての内容に関して正誤を答える。
課題５	3	3	文章の内容理解、選択肢（３択）	一日の生活に関する文章を読み、何時に、何をするなど選択肢の中から正答を選ぶ。
課題６	1	3	課題達成、選択肢や表書き込み	１名の基本情報と４名の紹介文を読み、内容を照らし合わせた上で、条件等から最も適した人を選ぶ。
６課題	23問	25点		

3.4　聴解

課題１では音声による挨拶に対し、吹き出しの中から適した挨拶を選択する独話×文字情報による挨拶の即時応答、課題２は音声による家族説明に対し、家族写真を選択する独話×視覚情報、課題３は旅行中の２人の会話を聞き、何を誰に買うのかが書かれたお土産リストの中から正答を選択する会話×文字情報、課題４は旅行後の感想を独話で語っているものを聞いた後、正誤を問う内容理解問題、課題５は課題遂行型の課題として電話会話における日程調整が行われた後、最終的な日程を選び出す問題とした。

聴解も読解と同じ１問１点とし、課題達成型の課題５のみ３点とした。

表４　聴解問題の細目表

課題	設問数	配点	設問タイプ	タスク
課題１	7	7	独話×文字情報 マッチング	挨拶の即時応答として吹き出しの中から適切な挨拶を選ぶ。
課題２	5	5	独話×視覚情報 マッチング	家族紹介の独話を聞いて、適切な家族写真を選ぶ。
課題３	5	5	会話×文字情報 マッチング	会話を聞いて、お土産リストの中から購入したお土産を選ぶ。
課題４	5	5	独話 内容理解／○×	旅行の感想の独話を聞いて、内容についての正誤を選ぶ。
課題５	1	3	会話 書き込み	電話会話を聞いて、条件等から最も適した曜日を選ぶ。
５課題	23問	25点		

3.5　作文

課題１は SNS の登録における名前、生年月日、趣味など個人情報の記載、課題２は日本人の友人へのどのような家かの説明を含め、何時に会うかを設定する招待メール、課題３は「やすみのひ」としたタイトルのブログへの書き込みとし、「いつどこで何をし、どうだったか」を書くよう指示文に記載した。

表５　作文問題の細目表

課題	設問数	配点		設問タイプ	タスク
		課題の達成度	言語能力質的側面		
課題１	1	５点	10点（２点×５）	記入（やりとり）	SNS の登録ページに個人情報の記載
課題２	1	５点		作文（やりとり）	友人への招待メールの作成
課題３	1	５点		作文（産出）	「休みの日」に関するブログの内容作文
３課題	３設問	25点			

作文の評価は各課題の達成度と書くことに関わる言語能力の質的側面５項目（一般的な使用可能言語の範囲、使用語彙領域、文法的正確さ、正書法の把握、一貫性と結束性）に分けた。配点は、各課題の達成度を３段階（０点、３点、５点）、書くことに関わる言語能力の質的側面５項目も３つのタスク全体で３段階（０点、１点、２点）とし、達成度と質的側面の両評価

の合計を得点とした。評価の際はCan–doで記述した評価基準を含む評価シート（図２）によって、２名の評価者がそれぞれ評価し、２者間の評価にズレがあった場合は話し合って調整した上で、共通の最終評価を出すこととした。

作文テスト評価シート

受験者　（　　）
テスター１（　　）テスター２（　　）

合計：　　点／25点　（ タスク達成：　　点/15点、質的側面：　　点/10点 ）

1）タスク達成

課題	カテゴリー 設問タイプ	Can–do	タスク達成 (0,3,5) /5点
1	やりとり 書式記入	コミュニティーサイトの登録欄に名前、国、誕生日、仕事、趣味など自分の情報を書くことができる。	★、★★、★★★
2	やりとり 通信	友人を家に招待するために、どんな家か、何時に来てほしいかなど具体的な情報をメールで伝えることができる。	★、★★、★★★
3	産出 創作	自分の休みの日について、いつ、どこで、なにをしたか、どうだったかなど、簡単な句で書くことができる。	★、★★、★★★

評価基準：　★★★　達成できた(5)、★★　部分的に達成できた(3)　、★　達成は困難だった(0)

2）質的側面

	カテゴリー	Can–do	質的側面 (0,1,2) /2点
1	一般的な使用可能言語の範囲	非常に基本的な範囲で、自分自身に関することや、具体的な欲求を満たすための単純な表現を知っている。	★、★★、★★★
2	使用語彙領域	特定の具体的な状況に関して、基本的な単語や言い回しのレパートリーを持っている。ただしそれらの間のつながりはない。	★、★★、★★★
3	文法的正確さ	学習済みのレパートリーの中から、限られた、いくつかの単純な文法構造や構文を使うことはできる。	★、★★、★★★
4	正書法の把握	例えば、簡単な記号や指示、日常的な物の名前、店の名前や番段使う定型表現など、馴染みのある単語や短い言い回しを書き写すことができる。当人の住所、国籍やその他の個人的な情報を正確に書くことができる。	★、★★、★★★
5	一貫性と結束性	「そして」「それから」のような、非常に基本的な並列の接続表現を用いて単語や語句をつなげることができる。	★、★★、★★★

評価基準：　★★★　できた(2)、★★　ある程度できた(1)、　★　困難だった(0)

図２　作文テスト評価シート

3.6　会話

会話では全て絵カードを準備し、絵カードに指示文を併記した上で課題を行った。課題１はパーティー会場において「名前、国、仕事、言葉、趣味」を独話形式で話す課題を設定した。課題２は「家族」・「食べ物」・「街」の中からトピックを１つ選択してもらい、「家族」ならば家族の人数や年齢、住まいなど、「食べ物」ならば朝食を食べるか、何を食べるかなど、「街」ならば住んでいる街はどんな街か、有名なものは何か、どのくらいで行けるかなどを交流会話[5]として行った。課題３は課題遂行型の課題とし、「ファーストフード」・「買いもの」・「タクシー」の中から場面を１つ選択してもらい、「ファーストフード」ならばメニューの注文、「買いもの」ならばサイズなどを含めた服の購入、「タクシー」ならば行き先、支払いを含めた実用会話を設定した。会話の試験ではいずれも絵カード（図3,4,5）を用いて行った。

表６　会話問題の細目表

課題	設問数	配点		設問タイプ	タスク
		課題の達成度	言語能力質的側面		
課題１	1	５点	10点（２点×５）	独話（産出）	自分についての独話
課題２	1	５点		交流会話（やりとり）	テスターとの質疑応答
課題３	1	５点		実用会話（やりとり）	実社会場面での課題遂行
３課題	３設問	25点			

図３　会話課題１絵カード

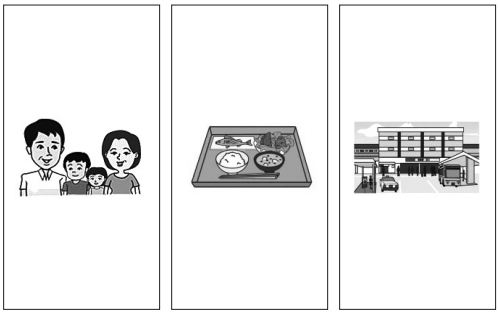
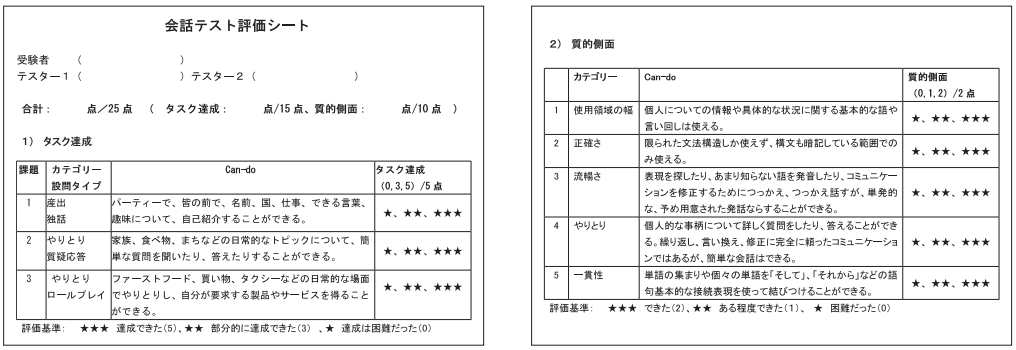


図４　会話課題２絵カード

図５　会話課題３絵カード

会話の評価と配点は、作文と同様、各課題の達成度と３つのタスク全体における言語能力の話しことばの質的側面５項目（使用語彙の幅、正確さ、流暢さ、やりとり、一貫性）をそれぞれ３段階で評価し、その合計を得点とした。Can–do で記述した評価基準を含む評価シート（図６）によって、２名のテスター兼評価者が会話テスト直後に各自評価し、２者間の調整の上、最終評価を決定することとした。



会話テスト評価シート

受験者　（　　）
テスター１（　　）テスター２（　　）

合計：　　点／25 点　（　タスク達成：　　点/15 点、質的側面：　　点/10 点　）

1）タスク達成

課題	カテゴリー 設問タイプ	Can–do	タスク達成 (0, 3, 5) /5 点
1	産出 独話	パーティーで、皆の前で、名前、国、仕事、できる言葉、趣味について、自己紹介することができる。	★、★★、★★★
2	やりとり 質疑応答	家族、食べ物、まちなどの日常的なトピックについて、簡単な質問を聞いたり、答えたりすることができる。	★、★★、★★★
3	やりとり ロールプレイ	ファーストフード、買い物、タクシーなどの日常的な場面でやりとりし、自分が要求する製品やサービスを得ることができる。	★、★★、★★★

評価基準：　★★★　達成できた(5)、★★　部分的に達成できた(3)　、★　達成は困難だった(0)

2）質的側面

	カテゴリー	Can–do	質的側面 (0, 1, 2) /2 点
1	使用領域の幅	個人についての情報や具体的な状況に関する基本的な語や言い回しは使える。	★、★★、★★★
2	正確さ	限られた文法構造しか使えず、構文も暗記している範囲でのみ使える。	★、★★、★★★
3	流暢さ	表現を探したり、あまり知らない語を発音したり、コミュニケーションを修正するためにつっかえ、つっかえ話すが、単発的な、予め用意された発話ならすることができる。	★、★★、★★★
4	やりとり	個人的な事柄について詳しく質問をしたり、答えることができる。繰り返し、言い換え、修正に完全に結ったコミュニケーションではあるが、簡単な会話はできる。	★、★★、★★★
5	一貫性	単語の集まりや個々の単語を「そして」、「それから」などの語句基本的な接続表現を使って結びつけることができる。	★、★★、★★★

評価基準：　★★★　できた(2)、★★　ある程度できた(1)、　★　困難だった(0)

図６　会話テスト評価シート

４．試験の実施と結果

4.1　試験の実施

試験は2012年６月26日と７月３日に、JFMD で JFS 日本語講座受講生を対象に行われた。JFMD と CASAASIA の JFS 講座４講座の受講生にレベル認定試験実施の案内を出し、受験希望者を募った結果、合計受験者は20名であった。受験者のうち、16名は『まるごと』入門Ａ１を修了後、初級Ａ２－１の L10まで学習しており、４名は入門Ａ１を修了した直後の学習者であった。本試験はＡ１レベル認定試験のため、今回はＡ１修了者のいる JFMD で行ったが、今後はＡ１修了者を対象に JFCO や MCJP でも実施する予定である。

4.2　評価

読解は表４、聴解は表５の配点に基づき採点し、試験実施者２名によりダブルチェックを行った。作文の採点は作成した評価シートに基づいて試験実施者２名でそれぞれ評価した結果を後日つき合わせた上、最終評価を決定した。会話については、テスター２名で会話試験を実施し、それぞれ評価した結果をその場でつき合わせて最終評価を決定した。４つの科目ごとに25点、合計100点満点で試験結果を集計した。

4.3　試験結果と通知

今回の試行試験の結果は、表７が各科目と４科目総合の基本統計量の表であり、図７に各科目の得点分布を示した。読解、作文、会話が高い平均得点率の中、聴解のみ75.2％の得点率に留まり、得点分布にばらつきが見られた。

受験者のＡ１認定の結果については、20名中19名がＡ１認定を受ける結果となり、聴解試験が７点だった１名について、合計点は60点以上であったが、合格基準点を満たせず不合格という結果になった。合格者19名には JFS 日本語講座レベル認定証を発行した。

表７　試験結果の概要

	読解	聴解	作文	会話	４科目総合
配点	25	25	25	25	100
平均点	24.65	18.8	24.35	24.05	91.85
平均得点率	98.6	75.2	97.4	96.2	91.85
標準偏差	0.93	4.67	0.93	1.79	6.01
最高値	25	25	25	25	100
最低値	22	7	22	19	78

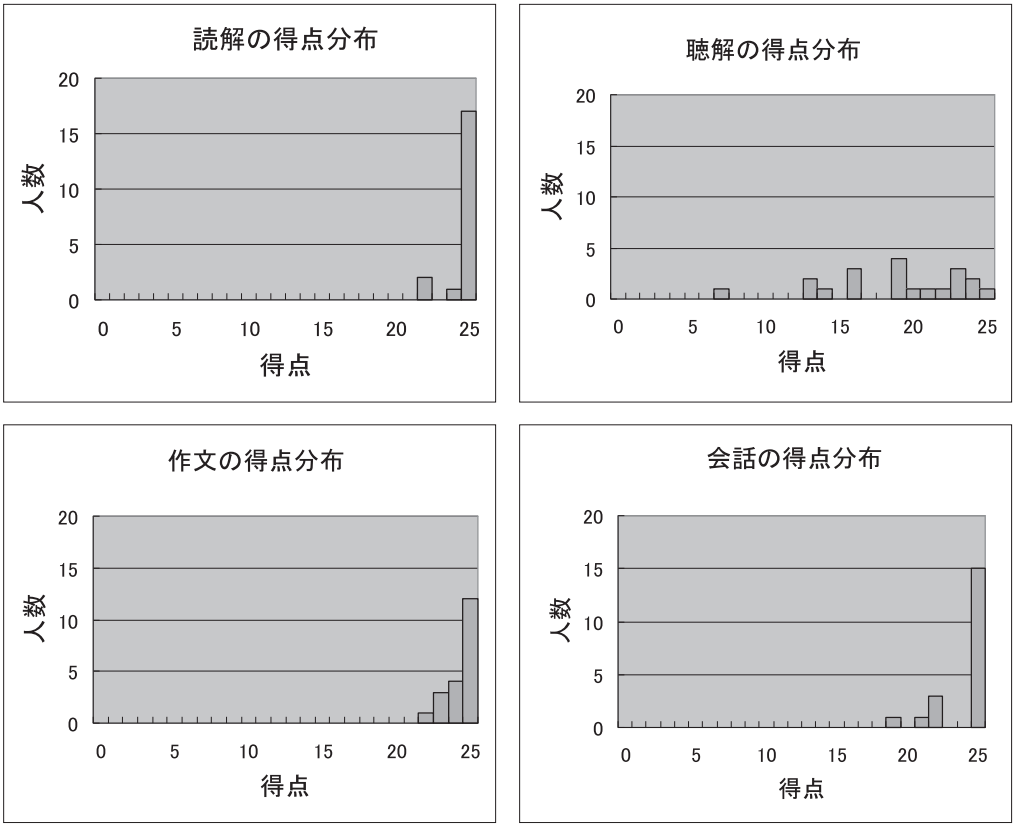


図７　科目別の得点分布

4.4　受験者アンケート調査結果

試験終了直後に受験者に対してアンケート調査を実施した。アンケート項目は、レベル認定試験受験の動機、科目別に時間設定と全体の難易度、各課題の難易度について５段階評価と自由コメント、また、A１のレベル認定試験として適切だったかに関して自由コメントを求めた。アンケート調査の結果は以下の通りである。受験者全員20名から有効回答が得られた。

表８　Q１　レベル認定試験受験の動機（複数回答可）

受験動機	自身の熟達度	次期講座受講	レベル証明	達成度テストとの違い	その他
回答数	15	5	10	6	3

Q１では受験の動機を知るため、「自身の日本語の熟達度がA１に達しているか知りたかった」「今後、JFS 講座や他の機関の日本語講座を受講する際に自身のレベルを証明するのに役

立つから」「会社、学校等でCEFRに準じた日本語力のレベル証明に役立つから」「コース中の達成度テストと熟達度テストの違いを知りたかったから」「その他」の５項目を用意し複数回答可とした。その結果、「自身の熟達度がＡ１に到達しているかどうかを知りたい」が受験者20名中回答数15、「学校や会社に示すレベル証明として必要だ」が回答数10で、CEFRに準じた熟達度レベルでの能力確認、社会に対するレベル証明といったニーズがあることを裏づける結果となった。

表９　Ｑ２　試験の時間設定と難易度について

	読解	聴解	作文	会話
時間設定	3.65	2.35	2.85	2.55
全体の難易度	2.75	3.95	3.15	2.95
課題の難易度　［課題１］	2.30	4.55	2.20	2.70
［課題２］	1.75	2.30	3.30	2.65
［課題３］	3.05	2.30	3.25	2.60
［課題４］	2.30	3.20		
［課題５］	2.65	3.10		
［課題６］	2.30			

Ｑ２の結果について、まず時間設定では、時間設定については、「［１］短すぎる・・・［５］長すぎる」の５段階の選択肢であり、数値が［３］に近いほど受験者にとって適当な時間であったということになる。平均は2.85と時間設定は適当であったといえるが、科目別に見ると、聴解が2.35とやや短く、読解が3.65とやや長いとの結果となった。聴解については「時間が足りなかった」とのコメントがある一方、読解については、「時間は十分にあった」というコメントが寄せられており、試験実施の際も設定時間50分の最後まで問題に取り組んでいたのは１名だった。作文についてはかなり個人差があり、早々と終わる学習者と、「もう少し時間がほしかった」という学習者がいた。

Ｑ２の難易度については、「［１］易しい・・・［５］難しい」の５段階であるが、平均は3.2と、受験者側からの印象でもＡ１のレベル認定試験として妥当であったといえる。ただし、聴解の課題１については、4.55とかなり難易度が高いという結果になり、「音声を聴く前に表現を読む時間を設けて欲しかった」という実施手順に関することから、「提示されている文が長く、これでは読解試験になってしまう」という設問形式の改善を希望する意見まで多数コメントが寄せられた。

試験全体への意見としては、「Ａ１のレベル認定試験として適当だと思う」という意見が７

件寄せられたほか、「１年間学んだテーマが網羅されていた」、「JFS 講座コース中の試験よりシンプルだった」という意見もあった。そのほかは、聴解試験に関するものが多く、「時間が足りなかった」「問題の解き方をもう少し説明してほしかった」などの意見が寄せられた。

５．結果の考察

5.1　A１レベル認定試験としての難易度

試行試験の結果から、正答率とその設問項目に受験者の能力を識別する能力がどのくらいあるかを示す識別力から試験の難易度の適切さや、改善が必要な設問を洗い出した。まず、今回の平均正答率は91.85％と非常に高い正答率であった。しかし、今回の試験の目的を確認すると、「A１レベルの学習を終えた学習者にA１レベルの力が身についているか」を測る試験である。一般的に多肢選択形式テストの正答率（最適困難度）は60％程度が望ましいといわれているが（中村2002)、今回のような目的の試験では、正答率が100％に近づくほど、試験としてのレベル設定が妥当であるとの考えから、正答率90％を設問難易度の分析基準とした。また、識別力については、0.3以下（小野塚2008）を改善が必要な設問とし、難易度と識別力において改善が必要な設問の条件を「正答率が90％以下かつ識別力が0.3以下」として取り出した。結果、正答率と識別力それぞれの条件に当てはまる項目は、表10に示したように存在したものの、両条件を満たし、改善が必要であると判断される設問は０であった。聴解では正答率が90％以下の設問が12あったが、識別力が0.3以下の３つの設問と同一ではない。このことから、A１レベルの講座を修了した学習者を対象にしたレベル認定試験としては適切な難易度だったといえるだろう。

表10　正答率90％以下、識別力0.3以下の設問数

	正答率が90％以下の設問数	識別力0.3以下の設問数
読解	0	2
聴解	12	3
作文	１（評価者 B）	0
会話	0	２（評価者 A）

5.2　聴解の文字選択肢

聴解のみ正答率が90％以下の項目が12項目と多く、受験者アンケート結果だけでなく、試験結果からも、今回の聴解テストがA１レベルの受験者にとって、難しい問題であったことが示された。特に正答率が40％ともっとも低かった課題１は受験者アンケートでも最も多く指摘が

あった課題である。挨拶を聞いて、その答えとなる表現を７つの文字選択肢から選ぶマッチング形式の課題であり、欧州の公的言語能力試験でよく扱われる設問形式であるが、日本語の場合、欧州言語では共通するアルファベットとは異なる表記による文字選択肢をスピーディーに読む能力が必要となるため、聴解能力とは別の文字を読む能力が必要となるということがわかった。

今後は文字選択肢に目を通す時間を十分に与える、文字選択肢の場合、マッチングなど多項目ではなく３択選択設問形式にする、あるいは選択肢はなるべく視覚情報にするなど、実施方法や設問形式の改善や工夫が必要である。

5.3　作文、会話の評価者間相関

作文と会話の試験においては、二人の評価者による評価を行い、その後すりあわせにより、最終評価を決定した。すり合わせ前の各評価者による評価の評価者間相関係数は、作文は0.40、会話は0.67であった。「評定者の間で十分なすりあわせができていない場合0.3～0.5、一般的には0.6くらいの信頼性を目指したい」（小野塚2008）によれば、妥当な結果といえるのではないだろうか。実際、評価を行った際、作文では友人を家に招待するメールを書くタスクで、「～時に来てください」などの招待にあたる表現が不十分であるなど、２人の評価者が解答を見て減点すべきだと感じるポイントはほぼ一致していたが、それを評価シートのタスク達成欄で減点するか、質的側面として減点するかに評価者間で違いが見られた。このような場合は評価者間で話し合いをし、招待というタスクが達成できていなかったと判断し、タスクの達成度で減点することとした。また、質的側面の評価基準はCEFRの言語能力に関する能力記述文の表現をそのまま採用しているが、正書法について、日本語の場合どのように捉えるかなどについて評価者間で評価が分かれる場合があった。A１の正書法の記述「当人の住所、国籍やその他の個人的な情報を正確に書くことができる。」に則り、「スペイン人」「名前」などの個人情報を正確に書けていない場合、減点対象とするが、その他の表現については「なじみのある単語や短い言い回しを書き写すことができる」であるため、書き写しではない作文課題においては正確に表記できていなくても本人が書かんとしている意図が伝わり、誤解が生じてタスクが達成できない間違いでない場合は減点対象とはしないこととした。

今後は、評価シートの表現を日本語に合わせて修正、具体化する、事前に評価シートの解釈が一致するよう評価練習を行うなどの改善が必要である。

６．おわりに

本試験の開発により、CEFRに基づいた言語試験の開発手順、課題や設問形式などの共通点は日本語の試験作成にも応用可能であり、日本語でもCEFRに基づいた試験の開発は可能であ

ることが示せた。また、日本語の表記や語彙や文型等の範囲に関しては、JFS に準拠し、日本語の文脈を考慮して作成された『まるごと』を拠り所にすることで解決の方向性を示すことができた。

一方、今回の試験試行の結果から聴解試験における文字選択肢の扱いや作文の評価基準など、JFS/CEFR 準拠の試験を欧州言語とは異なる日本語で行う場合、表記に関わる能力の不足によりタスク遂行やその評価に問題が生じることも明らかとなった。

今後は、明らかになった課題を中心に試験問題や実施方法を改善し、JFCO や MCJP の JFS 講座でも試用を重ね、評価、分析を行っていく予定である。また、A１以降のレベルについても引き続き試験開発を続け、JFS 日本語講座における CEFR や JFS に基づくレベル認定ニーズに応える共通試験として講座間で利用されるよう、試験としての質を高めていきたい。

〔注〕

(1)『まるごと』（入門Ａ１）は活動編、理解編、語彙帳の３分冊で構成されている。活動編は JFS のコミュニケーション言語活動を中心とし、日本語のコミュニケーション場面における課題遂行活動を重視し、社会文化なども含まれている。理解編はコミュニケーション言語能力を中心とし、語彙、文字、文法などの言語構造の整理、確認や各種練習のほか、読解や作文など読み書きの能力も配慮されている。コースは活動編、理解編を併用あるいは単独で組むことができるが、本研究では、活動編、理解編を併用した JFS 日本語講座の受講生を対象とした。『まるごと』の詳細については来嶋・八田・柴原（2012）を参照のこと。

(2)CEFR では、Ａ１、Ａ２、Ｂ１、Ｂ２、Ｃ１、Ｃ２の６段階の熟達度レベルが設定されており、JFS もこれに準じたレベル設定を採用している。

(3)JFS のパフォーマンスレベルと JLPT の合格についての小規模な連関調査は実施され、2012年９月に公表されている（国際交流基金日本語事業運営部2012）。

(4)各国の CEFR に基づく試験開発マニュアルや日本語試験問題について、本稿では詳述しないが、特にスペインの大学語学センター共通の試験開発マニュアル（ACLES 2011）や公立語学学校（EOI）の日本語試験問題などを試験開発の参考とした。

(5)『まるごと』では交流会話と実用会話が織り交ぜられて構成されている。交流会話とは休みの日に何をするかなど、相互理解のためのコミュニケーションの会話で、実用会話とはレストランの注文やタクシーの乗車などの実用的な会話のことである。

〔参考文献〕

小野塚若菜・島田めぐみ（2008）『日本語教師のための Excel でできるテスト分析入門』スリーエーネットワーク

来嶋洋美・柴原智代・八田直美（2012）「JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』第８号、103－117、独立行政法人国際交流基金

国際交流基金日本語事業運営部（2012）「JF 日本語教育スタンダードに基づいたパフォーマンス評価と日本語能力試験の合否判定との関係―国際交流基金研修参加者を対象とした試行調査―」、＜http : //

jfstandard.jp/information/attachements/000125/jfs_jlpt_report.pdf＞
国際交流基金（2010）『JF 日本語教育スタンダード2010　第２版』、独立行政法人国際交流基金、＜http : // jfstandard.jp/pdf/jfs 2010_all.pdf＞
国際交流基金（2011）『まるごと　日本のことばと文化　入門　A１　試用版』（活動編、理解編、語彙帳）、独立行政法人国際交流基金
中村洋一（著）大友賢二（監修）（2002）『テストで言語能力は測れるかー言語テストデータ分析入門ー』桐原書店
吉島茂・大橋理枝（訳、編）（2004）『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』初版第一版、朝日出版社
ACLES（2011）*Modelo de acreditación de exámenes de acles.*＜http : //www.acles.es＞
ALTE（2011）*Manual for Language Test Development and Examining.,* Council of Europe, ＜http : //www.coe.int/t/dg 4/linguistic/ManualtLangageTest−Alte 2011_EN.pdf＞
Council of Europe（2001）*Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment. Cambridge.* Cambridge University Press.
CIEP（2012）DALF 実施要綱＜http : //www.ciep.fr/es/delfdalf/epreuves.php＞，DALF　A１サンプル問題＜http : //www.ciep.fr/delfdalf/documents/DELF_A1. pdf＞
Goethe−Institut（2010）*DURCHFÜHRUNGSBESTIMMUNGEN,*（ゲーテ・ドイツ語検定試験 A１実施要綱）＜www.goethe.de/shop＞
Goethe−Institut（2012）*Materialienzu der Prufung Start Deutsch 1.*（ゲーテ・ドイツ語検定試験 A１試験サンプル）＜www.goethe.de/shop＞
Instituto Cervantes（2008）*DELE Modelo de examen Nivel A 1.* DELE（A１試験サンプル）＜http : //diplomas. cervantes.es/informacion−general/nivel−a1. html＞，DELE 実施要綱 ＜http : //dele.jp/index.html＞
サイトはいずれも2012年９月15日参照